

# Watch!

統計から社会の実情を読み取る

## 第8回 学校生活における儒教文化の影響

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。(財)国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)等。



### 女子の読書好きが世界標準

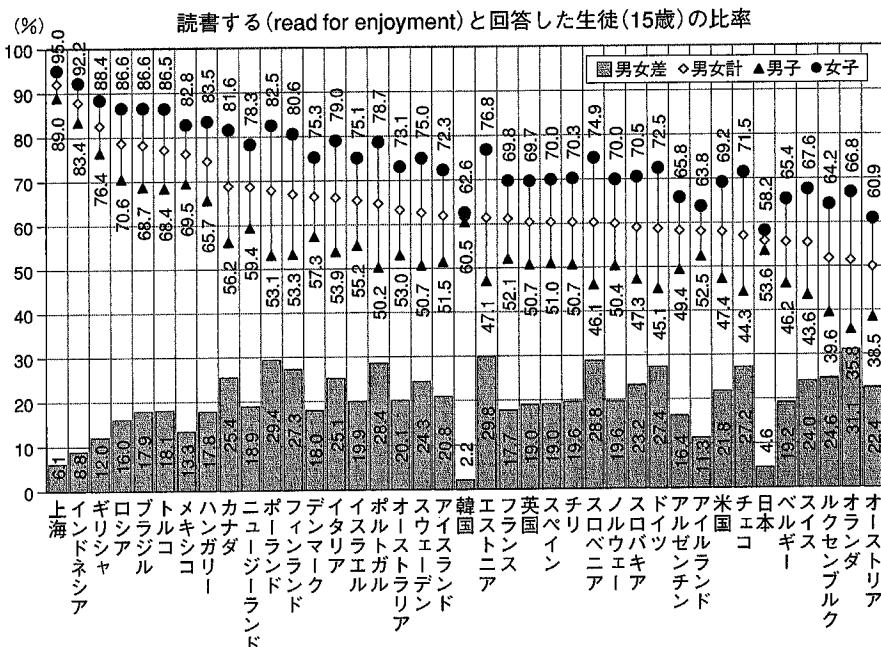
OECDのPISA調査では、3年ごとに各国比較可能な学力テストを行っており、その結果は世界各国で大きな関心を呼び、日本でもまた例外ではない。同調査では、学力と就学上の状況との関係を調べるために、様々な学校生活や生徒の状況について、直接、生徒に聞くという調査を並行実施している。

読書に関しては、生徒の読解力と読書比率(勉強でなく楽しみで読書している生徒の比率)との関係を調べ、両者には相関があるとの結論を出している。また両者の関係を詳しく分析し、少ない時間でも毎日読書を楽しんだ方が、一日に何時間も読書するより、読解力に差が出ることを突き止め、

毎日の読書へ向かわせることを、各国の政策担当者に勧めている。

ここでは、この設問を調査した39の国と地域について、読書する生徒の比率を男女別に掲げた

図1 読書する生徒の男女差(2009年)



注) PISA 2009による。OECD34か国及びその他4か国並びに1市の合計39国・地域の結果を男女計の比率の高い順に並べた。

資料) OECD 「Education at a Glance 2011」

(図1)。

男女計では、読書率は、最高は上海（中国）の92.0%から最低はオーストリアの50.0%までにわたっている。日本は55.8%で34位と下から6番目である。けっして読書好きな国とは言えない。読書以外にスポーツ、テレビ、ゲームなど楽しみの機会が多いからだと思われる。読書率の高い国を見ると、上から上海、インドネシア、ギリシャ、ロシア、ブラジル、トルコ、メキシコと途上国やそれに近い国が並んでおり、また、下にはオーストリア、オランダ、ルクセンブルクと先進国が並んでいることからも、この点は裏づけられよう。

ここで着目したいのは、読書率の男女差である。

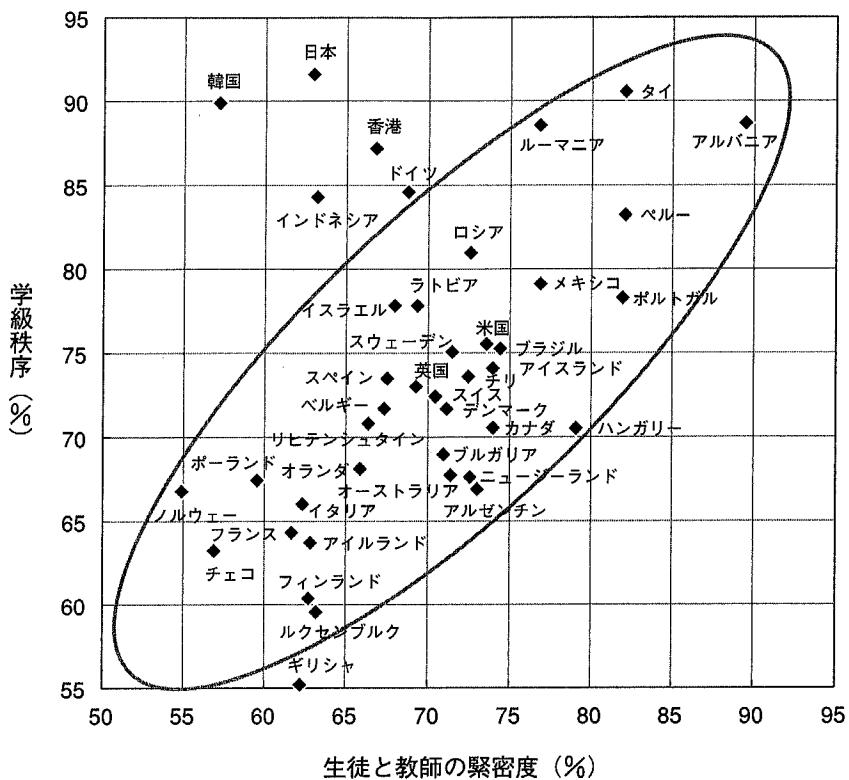
いずれの国でも女子が男子を上回っている。世界的に読書が女子生徒に人気の高いことが分かる。女子は読書、男子はスポーツというのがだいたいの相場なのである。

ところが、経済発展度とも関係した読書率の高低とは無関係に、男女差の小さい点で目立つてゐる国がいくつかある。上海、韓国、日本である。華僑の影響があるインドネシアも、この3国に次いで男女差が小さい。これは明らかに男子における読書の価値を重んじる儒教の伝統が影響していると考えられる。

## 師弟の間に一定の距離を置く儒教国

PISA調査では、学級秩序 (Disciplinary climate during lessons) や師弟関係 (Teacher-

図2 師弟関係と学級秩序の相関図（2009年）



注) 学級秩序は「生徒が教師の言うことを聞いていない」という設問に否定的な生徒（15歳、日本では高校1年）の割合、生徒と教師の緊密度は「多くの先生は実際に私の言いたいことを聞いてくれる」という設問に肯定的な生徒の割合である。

資料) OECD「PISA at a Glance」

student relations) についても、生徒に直接聞く設問を設定している。ここでは、それについての代表的な問い合わせの結果をX軸、Y軸にとった相関図を描いた（図2）。

学校教育において、学級崩壊、授業崩壊などが問題となっているが、日本は世界と比べて、そのような状況がどの程度進んでいるのであろうか。41か国の国際比較の結果では、日本は学級秩序が世界の中で最も保たれている国となっている。Y軸の値を見て欲しい。ここには「生徒が教師の言うことを聞いていない」かどうかについて、プラスの評価の順に比率を示している。この指標で見る限り、日本はタイや韓国を上回っており、生徒が最も先生に従順な国なのである。

次に、師弟関係については、「多くの先生は実際に私の言いたいことを聞いてくれる」という設

問に対する肯定的な回答の比率を X 軸に掲げた。学級秩序では世界トップであった日本であるが、師弟関係の緊密度のランクは 41 か国中下から 10 番目と低水準である。金八先生は日本ではそう多くないのだ。多くないからドラマの題材となる訳である。

さらに興味深いことは、両者の関係である。一般的には、学級秩序と師弟関係（緊密度）は比例しており、途上国ほど学級秩序は保たれ、生徒と教師の関係は緊密であることが分かる。逆に先進国では、両方ともダメである。先生が一生懸命なら生徒も真剣に先生の言うことを聞くし、逆なら逆という関係になっているのである。

こうした正の相関関係から左上方向に外れているのが、日本、韓国、香港、インドネシアといったアジアの国々である。ドイツも実はこのアジア・グループに近い。そしてこれらの国々のうち、日本、韓国、香港は、世界の中でも学力がかなり高いグループなのだ（なお、上海ではこの問い合わせを実施しておらず、香港では読書の方の問い合わせを実施していない）。

日本だけが特殊ではないことが分かる。おそらく、儒教精神が残っている国では、生徒と先生の間には一定程度の距離がある方が、かえって授業の緊張関係を保てるという側面があると考えられる。師弟関係の緊密度・希薄度を論評して、単純に、良い悪いとは言えないものである。

## 儒教文化の可能性

このように、読書率の男女差、さらには、学級秩序と師弟関係の相関という学校生活におけるかなり異なった二つの側面において、世界の国々の中で、東アジア儒教国ならではの特徴が認められる。政治体制の違い、経済発展の段階差をこえて、こうした共通項が存在している点に、儒教文化の根強さを見て取ることができよう。

前回 1 月号では、男女別の幸福度の国際比較から、東アジア諸国に共通の特長として、儒教道徳にしばられて、男が女に比べて精神的に解放されていないのではないかという点を指摘した。日本は、明治維新後、長く欧米文化の影響を受け続け、特に第 2 次世界大戦の敗戦ショックを契機に、戦前の道徳教育から、180 度、脱した筈であるのに、儒教の影響が残っているなどというのは、何かの間違いではないかと疑う向きもある。しかし、長い間に染みついた考え方方が親から子へと受け継がれている側面とともに、以上で見てきた通り、民主主義教育が徹底された筈の学校教育においても、儒教文化の影響がなお根強いという側面も無視できないのではないかと思われる。

儒教は仏教とともに、もともとは、獸のような暮らしにうんざりしてきた古代人に、人間としての生き方を指し示した古代アジアの 2 大思想の一つであり、宮崎市定（1969）が指摘したように、孔子が強調していた「仁・礼・信」から、権力者の都合の良いようにむしろ「忠・孝」が上位に置かれるように至るなど後世に悪用が進んだため、その反動から無闇に脱却が図られるようになつたに過ぎない。このゆがめられた儒教道徳にしばられず、儒教道徳のそもそもの由来に立ち返れば、男子が読書好きであり、友のように親しく接していなくても師は師として敬うという儒教文化の中に、むしろ、東アジアから世界へ向けての貢献の可能性を見ることもできよう。

### \*参考文献

[1] 宮崎市定（1969）：論語の新しい読み方。

### \*「社会実情データ図録」関連図録

[1] 図録 3940 「学力の国際比較（OECD の PISA 調査）」

[2] 図録 3942 「学級秩序の国際比較（PISA 調査）」

[3] 図録 3942a 「師弟関係の国際比較（PISA 調査）」